NPO法人 長崎史談会

長崎学レポート

第16号
2024年9月1日発行
長崎学レポート
編集委員会
〒850-0861
長崎市江戸町5-8
第5一ノ瀬中央橋ビル

2024年度　第1回公開講座 2024年4月20日 ・ 第2回公開講座 2024年6月15日

第一回長崎学公開講座 第一部発表要旨

ミュンヘンに眠るシーボルトの長崎関係コレクション

原田　博二

一、シーボルトとミュンヘン国立五大陸博物館

写1　ミュンヘン国立五大陸博物館

平成二五年（二〇一三）九月と同二六年三月、国立歴史民俗博物館（千葉県佐倉市）の館外研究員としてドイツのミュンヘン国立五大陸博物館（旧ミュンヘン国立民族学博物館、以下「五大陸博物館」と記述）でシーボルトの長崎関係コレクションについて調査を行った。

その成果は、国立歴史民俗博物館主催『特別展よみがえれ！シーボルトの日本博物館』（長崎会場：長崎歴史文化博物館、会期：平成二九年二月一八日～四月二日）にまとめられた。

写2　隠元・木庵・鉄心画像

二、鉄心道胖画像

五大陸博物館には「隠元題隠元隆琦画像（S1477）」、「木庵題木庵性瑫画像（S14479）」、「岳宗元章題鉄心道胖画像（S14478）」の三面（A）が所蔵されている（写2）。

これらの画像は、現在、額装となっているが、残存の表具の形式からもとは三幅対であった。

写3　印章「長」

この隠元画像と木庵画像には「長」の印章があるが（写3）、これは、長兵衛こと喜多道矩の印章である。鉄心画像には印章はない。

また鉄心画像には「寶永七年歳次庚寅春三月吉旦　傳臨済三十五世嗣法徒岳宗璋謹題」とあるので、宝永七年（一七一〇）岳宗（聖福寺四代住職）によって題が書かれている。

しかし、これらの画像は、筆者の調査で隠元、木庵、鉄心の画像と確認されるまでは、五大陸博物館も誰の画像か不明としていた。

さらにはシーボルトの長男アレキサンダー・シーボルトが作成したリストにも資料番号S1447には「Sensja宗の開祖」、同S14478には「日本で最初に僧籍を得た帝の息子」（後述するように鉄心は天皇の皇子ではない）、同S14479には「有名な高僧」とあるだけで、アレキサンダーも、当のシーボルトもこれらの三人の画像が誰であるか認識していなかったのである。

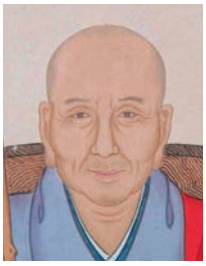
ところで隠元も木庵もその面貌、さらにはその題からすぐに隠元と木庵の画像と確認できたが、聖福寺（玉園町）の開山である鉄心については、同

この会は個人会員と法人会員の皆様により運営されています

松翁軒　森谷商会　小野原本店　浜屋　メモリード　十八親和銀行　長崎バス　文明堂総本店　みろくや　福砂屋

寺などに所蔵されている晩年の鉄心の画像（写５）と違って、壮年の頃の面貌（写４）に描かれているためすぐには鉄心と確認できなかった。

写４　鉄心画像（部分）


写５　鉄心画像（部分）聖福寺所蔵

前述のようにこれらの画像は、元は三幅対であった。勿論、黄檗宗の開祖隠元が中幅で、万福寺二代住職で紫雲派の開祖木庵が右幅。それでは左幅は誰かということで、岳宗が書いた題を読むと「生于長崎」「開聖福寺」「紫雲（木庵）嫡子」などとあることから鉄心の画像と確認することができたのである。

鉄心は、中国人陳朴純と長崎の女性西村氏の間に生まれ、後に出家、延宝五年（一六七七）長崎に聖福寺を開創、初代住職となり、さらに同七年（一六七九）木庵に嗣法（三四世）した。

写６　岳宗題鉄心画像（部分）

それではこの画像は、どこに所蔵されていたかというと、鉄心の画像に岳宗の題があることから聖福寺の末庵四休庵の什物であったと考えられる。

というのは鉄心には付法した僧（弟子）が一一人いたが、これらの内、暁岩元明（宝永三年嗣法）と岳宗（宝永五年嗣法）の二人が有力で、暁岩は聖福寺の二代住職に、岳宗は四代住職に就任している。

そこで鉄心は、所持していた二種類（A・B）の隠元・木庵・鉄心の三幅対の内、現在、聖福寺に所蔵されている三幅対（B）を暁岩に、現在、五大陸博物館に所蔵されている三幅対（A）を岳宗に与えたのである。

このようなことから鉄心が所蔵した三幅対（A・B）の内、Bは聖福寺に、Aは末庵四休庵に伝えられることとなった。

四休庵は、聖福寺の山門西側にあった末庵で、元禄元年（一六八八）鉄心が開創、鉄心の示寂後、岳宗が再興、二代庵主となった。

以来、四休庵は、聖福寺の末庵として重きをなしたが、維新後まもなく廃庵になった。

これらの三幅対もBは聖福寺に現在も所蔵されているが、Aは外部に流出、安政六年（一八五九）再来日したシーボルトの所有するところとなったものと考えられる。

三、結語

これまで誰の画像かわからなかった三面の画像（A）が隠元、木庵、鉄心の画像で、もとは三幅対であったことが判明した。

さらにこれらの画像（三幅対A）は、聖福寺の末庵四休庵に所蔵されたこと、幕末期、同庵の経済的な困窮のなかで外部に流出、シーボルトの収集するところとなったことなども判明した。

第二回長崎学公開講座
第一部発表要旨
長崎史談会創立期の人々

大田　由紀

一、はじめに

長崎史談会（以下、史談会と記述）は令和一〇年（二〇二八）創立一〇〇周年を迎える。

史談会の機関誌となる『長崎談叢』（以下『談叢』と記述）は史談会創立以前に誕生している。

二、長崎談叢の創刊

県立長崎図書館長永山時英は、郷土史を研究する若手研究家の談論風発の場として館長室を週一回開放した。そこに集まっていたのは、長崎学の祖といわれる郷土史研究家古賀十二郎のもとや、図書館に出入りしていた神代祇彦（こうしろまさひこ）、林源吉、小川三樹、渡辺庫輔、蒲原晴夫、田淵栄蔵、大庭耀、津田繁二、丸山敏雄、増田廉吉、藤木喜平、瀬戸崎半吾の一二人（以下、姓のみ記述）であった。

のちに彼らは史談会の発起人となり、初代の幹事として活躍した。

そのなかの一人、藤木は雑誌の出版を目論む。「（前略）文化の地方分散を企て、長崎にもそうした運動を期待してのことと、殊に長崎は日本近世文化の発祥地であり、その母胎である関係から眠れる文化の聖燭を掻き立てたい念願で（後略）」（神代「一〇年の回想」『談叢三五輯』）

藤木は福岡県生まれ、長崎の紙屋に奉公したのち、藤木博英社を創業、印刷業を通し、地元長崎の文化向上に貢献した。藤木から相談を受けた神代（当時長崎日日新聞記者）と林が中心になり準備を進める。

原稿は忽ちに集まり、内容も「それらの言説は全国の学者研究家の注意を喚起するに十分なもの」（神代）であった。

『談叢』創刊号の表紙

創刊号は昭和三年（一九二八）五月一五日に発

行、編集者神代、発行兼印刷者藤木、定価は五〇銭であった。

表紙の図案は、幹事の一人、長崎商工奨励館長小川が描いた。印刷した一〇〇〇部は瞬く間に売れたが、印刷技術も紙質も最高レベルという贅沢な雑誌で、それには藤木の採算を度外視した貢献によるものである。

三、長崎史談会の創立

『談叢』の創刊が契機になり、史談会誕生の機運がうまれた。

昭和三年五月二六日夜、県立長崎図書館で発起人会を開き、六月七日夜、精洋亭(西濱町)で発会式ならびに第一回幹事会を開催した。役員および顧問は次のように推奨決定した。

会長佐藤県学務部長、幹事は前述した一二人。このうち年齢が推測されるのは、藤木三九歳、神代三九歳、林四五歳、渡辺二七歳、蒲原二八歳、丸山三六歳、増田三一歳と思われ、少壮気鋭の集団であった。

顧問には、伊東県知事、富永市長、永山県立図書館長、武藤長崎高等商業学校教授、呉秀三東京帝国大学名誉教授、国友鼎長崎医科大学教授、新村出京都帝国大学教授、古賀十二郎と、錚々たる名前が並んだ。重鎮たちは若手研究家の自主性を重んじ、後進の郷土研究を盛り立てていこうとする意図がうかがえる。

会では談話会、研究発表会、講演会、史跡見学、史跡資料の保存、図書雑誌の刊行などといった事業を進めることとなった。

四、設立趣意

史談会設立趣旨を抜粋し、一部を紹介する。

「歴史は永遠に長崎を語り長崎を導くものである。(略)私共はこの意味からいって今日長崎の地に此種研究の相互機関なく共同助勢なきを遺憾とすること久しい。このことなくして徒らに長崎を論議し長崎の成長を企画せんとするのは決して当を得べきものでない。それは決して真の長崎に忠実なる所以でないからである。

私共はこの点について大いに感ずる所があり、ここに長崎史談会なるものを組織して先ずこの誤りなき長崎史の研究に向って歩を進めたいと思うものである。」

五、『談叢』の編集人

その後、『談叢』は史談会の機関誌となり、一〇〇輯(平成二七年一〇月発行、以後休刊)まで九五二編の会員の論考が発表された。

創刊からの編集を担当した神代は、『談叢』編集の基礎を作った。しかしながら、東京支社長として転勤、九輯から津田に交代した。津田は、三菱長崎造船所勤務の傍ら、郷土史研究を続けた。

一〇輯以降の表紙の表紙図案を描いた林は、美術工芸に詳しく、市商品陳列所と、その後身の市立博物館(昭和一六年開館)に勤務した。また、創刊号から亡くなる直前の四〇輯まで毎回欠かさず寄稿。別に「双樹園」というペンネームでも執筆している。

創立一〇周年特集号。表紙は林がデザインした史談会マーク。題字は藤木(昭和一三年六月発行)

二一輯からの編集を担った県立長崎図書館司書の中村重嘉は、慶応大学卒の新進の研究者であったが、昭和一九年(一九四四)春、朝鮮部隊に応召中に病のため死去した。

六、まとめ

戦中戦後は史談会活動のもっとも困難な時期であった。『談叢三四輯』は昭和一九年八月発行、『談叢三五輯』は昭和二四年(一九四九)八月の発行である。

三四輯は「国体信仰昂揚号」、白表紙である

この空白の間には、家族や同志を戦争や原爆で亡くし、また、蒐集した貴重な文献や書き溜めた原稿を焼失することもあったであろう。挫折感や悲しみを乗り越え、長崎史研究という目標に向かって、再び史談会の活動が始まったのである。

第一回長崎学公開講座 第二部発表要旨

長崎の斎藤茂吉

堀田　武弘

筆者が長崎と縁深い歌人斎藤茂吉を知ったのは、ちょうど七〇年前、長崎市立伊良林小学校六年生の時だった。国語の授業で学んだ斎藤茂吉、この時の教科書が勝山小学校の書庫に保存してあった。教科書には次のように記載されてあった。

「『朝明けて船より鳴れる太笛の　こだまは長しなみよろう山』歌人斎藤茂吉は、長崎の港を、こう歌によんでいる…」

小学校の教科書に載る斎藤茂吉、この時から茂吉ファンの一人となった。

茂吉が長崎医学専門学校教授として赴任したのは大正六年(一九一七)一二月、それから大正一〇年(一九二一)三月までの三年三カ月間を長崎で暮らした。その間多くの人と交遊しユニークな話題を残した。茂吉が長崎を去って今年で一〇三年になる。

長崎で最も親しかった

歌人は、中島川河畔の袋橋そばで燃料商を営んでいた松本松五郎だった。

松五郎の長女名那さんは、平成一〇年（一九九八）父の形見として保管していた茂吉等の関連資料を、当時の長崎市立博物館に寄贈した。その数八一点、そのなかから紹介する。

松五郎の結婚は大正九年（一九二〇）のこと、茂吉はその宴席で祝賀の文人画を描いた。子供のころから絵が得意だっただけに即興とはいえ立派な出来栄えである。

「蓬莱山瑞雲夫婦鶴双亀嬉戯圖　大茂吉密画」と書き、夫婦鶴、万年亀を描いている（写1）。

写1　茂吉筆結婚祝い密画（筆者撮影）

この絵に添えられたのが、わら半紙にしたためられた長歌、これも座興の席での作とはいえ、茂吉が詠んだ生涯唯一の長歌である。

「…長崎の港のみづのいや深し　いやしづかなるその水を　けふこよひこころあいいだく　女男ふたりはや」と詠む。

大正七年（一九一八）夏には、大正ロマンを代表する叙情画家竹久夢二が長崎を訪れ、銅座の素封家永見徳太郎邸に留まった。応接間で写る記念写真（写2）には、夢二をはじめ徳太郎、茂吉、松五郎らの姿がみえる。

写2　左から徳太郎、茂吉、一人おいて夢二、松五郎（筆者蔵）

また、長崎の文化人たちは夢二の歓迎会を催し、そのときに松五郎夫人の絹の帯に、短歌一首を茂吉や夢二など参加したそれぞれがしたためた。

茂吉と長崎の人々との深い絆を感じさせる貴重な資料である。

第二回長崎学公開講座 第二部発表要旨

明治七年の金星観測

八木　久雄

明治七年（一八七四）十二月九日、日本政府の許可のもと、欧米各国による金星の太陽面通過観測（以下「金星観測」と記述）が行われた。長崎・大平山ではアメリカ隊が、金比羅山ではフランス隊が、神戸・諏訪山ではフランス分隊が、横浜ではメキシコ隊が金星観測を行っている。

フランス隊観測地
金比羅山（長崎市）

金星の太陽面通過は一〇五年ぶりに起こる稀な現象であり、各国は、この機会に金星観測を実施し、地球と太陽の距離を求めようとした。

ところが成立間もない日本政府の要人たちは、金星の太陽面通過についての意図を理解出来ずにいた。そこで文部省顧問アメリカ人ダビット・モルレーや当時唯一の天文学関係官庁であった海軍省水路寮（以下「水路寮」と記述）長官柳楢悦が上申し、欧米各国による金星観測の目的について政府に理解を求めた。柳は長崎海軍伝習所で航海術を学んだ人物である。

水路寮は、長崎、神戸、横浜の各国の観測隊に多くの士官等を派遣した。そこで彼らは、子午儀や特殊レンズカメラなど最新の天文機器を使用した天体観測法を学んだ。

フランス隊使用の子午儀（明石天文科学館所蔵）許可を得て筆者撮影

長崎のアメリカ隊やフランス隊で学んだ士官等は、長崎・福済寺に臨時観測所を設け金星観測を行った。

フランス分隊に同行した水路寮の士官等は、長崎や神戸で学んだ観測法をもとに神戸・摩耶山で、横浜のメキシコ隊に派遣された士官等は、東京麻布飯倉（旧・東京天文台）で金星観測を行った。

外務省は、金星観測隊の国内入国に際し、観測機器や付属品など持込品の無関税・無検査を実施、国内の自由な移動を許可した。

工部省は、通信士を派遣、各国の観測地と電信局間に無料で電柱を建て、電線を架設した。長崎では、大浦の大北電信会社長崎支局から金比羅山の観測地まで電線を架設している。

内務省は、御雇外国人学監ヘンリー・シャボーをメキシコ隊に派遣、東京・御殿山で、金星観測を行った。

このように、明治七年の欧米各国による金星観測は、日本政府の全面的な協力を得て成し遂げられた。また、水路寮の士官等による最新の天体観測技術の習得は、明治二一年（一八八八）の東京天文台設立へと繋がった。

参考文献　原口孝明『明治七年の金星日面経過観測』（私家版平成一一年）斎藤国治『星の古記録』（岩波書店　昭和五七年）
協力　明石天文科学館